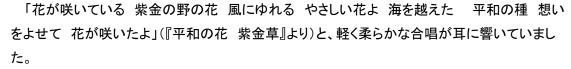


「笹川杯作文コンクール 2012」~日本語で応募~優秀賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

紫金草の思い出

鲁東大学 張姗



そうでした。先生と初めて会ったのは、大学一年生の日本語会話授業の時でした。「ねえねえ、聞いて。会話の授業を担当する先生のこと、知ってる?中国語がお上手だって」と周りに集まった女子学生がつぶやきました。しばらくして、先生がいらっしゃいました。にこにこして、とてもやさしそうでした。それが私の先生に対する初印象でした。また、確かに中国語がお上手です。

大学に入学した直後で、日本語が全然分からない私たちに対し、先生はまじめで親切にいろいろ教えてくださいました。単なる日本語ではなく、日本文化や風俗などのことも含んでいます。「若いうちに、できれば多くの知識を身につけて」とも丁寧に分かりやすく教え諭しました。いつも和やかな雰囲気で授業を行いましたから、みんなはとても熱心でした。ある日、先生は新出単語の書き取りをさせました。クラスの中に満点を取った人は一人しかいませんでした。勉学に勤しんでいた李さんでした。教壇に立っていた先生はその李さんを褒めました。「よくできましたね、李さん。すごーい」と。私は一つの間違いだけで99点を取りました。ふだん一生懸命勉強していたので、こんなささいなところで間違ってしまうなんてと、とても悔しい気持ちになったことがあります。正直言うと、私は人に負けたくないタイプです。先生に評価してもらいたくて、それから半年間ずっと日本語に打ち込んできました。ある日、先生に相談することがあり、事務室に行きました。タイミング悪く、先生は他の人と話をしていました。外で待っていたところ、次のような話が耳に入りました。「張さんは、本当に真面目な子だ。いつもよく頑張ってるよ」と。その時、私は何もいえず、涙で目頭が熱くなりました。

教科書に書いていることだけを教えてくださったのではなく、先生は自らの経験を私たちと分かちあっていました。 それらの中で私に一番強い印象を与えたのは紫金草のことでした。紫金草という花は、わが国の南京地方では「二月蘭」と呼ばれています。抗日戦争当時、日本人の薬学者で、陸軍衛生材料廠の廠長だった山口誠太郎さんが、昭和14年に南京でこの花に出合いました。彼は平和を呼びかける思いで「紫金草」と名づけ、種子を蒔き広めて行きました。後日、このことを題材に『平和の花 紫金草』という合唱曲が制作され、1998年東京の足立区で初演されたということです。そして、2001年3月には南京市でも日本から200人の合唱団が訪中し公演をしました。その後、ほとんど毎年中国に来たそうです。メンバーは全員退職者の方で、平均年齢は60歳を越えます。先生の奥様も合唱団の一員だそうで、2011年3月、南京で公演をされました。

誰も知っている通り、折しも日本は東日本大震災に襲われ、未曾有の被害を被りました。白む空に立ち上る幾筋もの煙、横倒しの高速道路。ビルが倒れたり、人が生き埋めになったりして、にぎやかな町はあっという間に廃墟になってしまいました。テレビに見入った時のその惨状を今でも忘れません。それにもかかわらず、紫金草合唱団は活動を取り消さずに、予定通り訪中されました。新聞社の取材を受けた時、創立人の大門高子さんは「地震と津波が起きたせいで、家族を失ってしまったメンバーが何人もいます。延期するかどうか迷っていました。地震・津波は天災ですけれど、戦争は人災です。戦争はすべての生命を奪う恐れがあります。予定より人数は少ないですが、困難を乗り越えて南京にやって来ました。私たちは平和を祈求する人の集まりで、世界の平和を守ろうと望んでいますから」と語りました。

先生から伺った「紫金草の物語」です。先生と一緒に勉強してきましたが、いよいよお別れしなければならない時が来ました。先生はいつものように、ずっとにこにこしていました。しかし、その笑顔の中に少し悲しさが感じられました。その時、鬱々とした様子の私たちを見て、「最後じゃないから。また会えるからね」と、先生が慰めてくださいました。その言葉を聞き、私は少し落ち着きました。確かに、先生の言うとおり、たとえ離れていても、相手を思う気持ちがあれば、互いの絆が消え去ることはありません。

最後になりますが、私は中国で日本語教師として働き、長年中日交流に大きな貢献を果たされた先生に感謝の 意を表したいです。いままで長い間ありがとうございました。

「花と生きる 広い空見上げて 風よ教えて心の絆を大地の友と共に生きる 誓いを胸に 花を咲かそう」 平和の花は、海を越え、そこにいる人々の心に咲き満ちる。それは私の祈りです